

父親殺しの二つの場所

## ドストエフスキー紀行

亀山郁夫

1 二〇〇一年九月

1-1 モスクワ——ザライスク

午前十時過ぎ、ホテル・ウクライナの前庭から勢いよく発進した私たちの車は、左手に白亜のビルを望むトロイツキー橋を渡り終えたところで、にわかには速度をダウンさせた。腰を浮かし、首をのぼして、フロントガラスに目をやると、黒いメルセデスの小型車が、隣り車線から強引に割り込みもうとして斜めに道を塞いでいる。かつて中東で外交官として働いたこともあるという浅黒い顔の運転手が、「畜生！」と呟き、大きめに首を振った。「さつさと行け」の合図だ。

「ロシア人（ノーヴィエ・ルースキエ）？」

私の問いに、運転手ははてというように軽く頭をかしげ、再び両手をハンドルにかけた。その言葉、いやその問いが、あまりに時代遅れなものに響いたのだろうか。ワイパーで扇型に仕切られた空が、光化学スモッグのせいでも、息苦しいほど白くにごっている。成田を発つ前から、抜けるような青空の下でのドライブを能天気な思い描いていただけに、失望は大きかった。車はやがて、モスクワ川沿いのドライブウエーに入るために左折し、地下鉄スモレンスカヤ駅に近い入り組んだ横町を、野良猫のようなやみくもの身のこなしですり抜けてから、大環状道路にひよいて鎌首を突き出した。排気ガスの臭いが一気に立ち込め、私はあわてて窓ガラスのハンドルに手をかける。

もはやモスクワの名物ともいつていい光化学スモッグの原因の一つが、都心をめざして雲霞のように押しよせる車のこの排気ガスにあることは疑うべくもなかった。雨だれの跡や濁った泥で綿々になった対向車の、どこかしら必死の面持ちに横目をつかいながら、私はふと思う。実質失業率が三割を超えるという大都会のどこへ、これらの車は吸い込まれていくのか。いや、そもそもこの私は、モスクワの市民が汗水ながして稼ぐ月収に近い「大枚」をはたいて、どこへ向かうとしているのか。

モスクワ市の境界を示す外環状道路が見える頃には、対向車の帯もいつの間にか途切れ、空の重さもとれて、少しずつ明るさをましていくようだった。やがて車がおカ川の支流にさしかかり、松や白樺の並木やなだらかな草地が車窓を押し広げていくと、そこはもう「ロシア的」という月並みなため息で形容するしかない、呪わしくも貧しい大地——。ゆるゆるした陽射しと心地よい振動におもわず瞼が落ちる。はじめは、身振り手振りをまじえ、モスクワの案内に機嫌よく声を上げさせていた運転手も、相手の無愛想に気おされた様子で、いつのまにかひっそりと口をつぐんでしまった。その運転手の、「コロムナ」という甲高い声でわれに返った。モスクワに来る国際線のスカイマップでよく見かける中部ロシアの小都市といつても、これといった特色はなくて、セメント工業で辛うじて知られるぐらいの、人口十五万足らずの田舎町なのだが、車窓から見たたまたま、どこか小モスクワといった気品ある風情を漂わせていて、目に心地よい。

今から百七十年前、ドストエフスキー一家は、待望の夏が訪れてくると、駅通馬車を雇い、領地のあるトゥーラ県へと旅立つていった。わずか二五〇キロの道のりではあつても、住みなれた病院官舎を離れ、二月に近い長逗留ともなれば、それなりに周到に支度を整え、大騒ぎしての旅立ちとなった。領地までの二泊三日の旅で、最初の宿泊地がこのコロムナだった。当時はまだ十歳の少年フェージャだが、兄のミハイル、弟のアンドレイと旅籠屋で迎える最初の夜に、どんなに胸をはずませたことだろう。

もつとも一家が、トゥーラ県の領地で明るい夏を過ごすことができたのは、わずかに五年の短い期間にすぎなかった。一八三六年の夏、少年フェージャが十五歳を迎えた年、父に連れられ、兄ミハイルとその村を訪ねてから、領地での夏の生活はふつりと途切れることになった。結核の業病にながく苦しめられてきた母がついにこの世を去ったのと、工兵学校に進学するためにペテルブルグへ送られることになったかの理由である。

それから四十年近くへだてた二八七七年七月、すでに五十代の半ばを過ぎ、ロシアの文豪としてゆるぎない地位を築き、月刊誌『作家の日記』の出版に熱意を燃やすドストエフスキーは、妻アンナのつよい勧めもあつて、元の領地へ一人旅を試みている。一八六二年に敷設されたモスクワ―コロンナ間の鉄道は、その後リヤザンまで延伸となり、七〇年代には複線化も実現して、一家の領地に近いザライスクの町にも支線が延びていた。ドストエフスキーは、駅通馬車の時代に二泊目の宿をとつたりハヴィツツイまで、石炭の煙の快い臭いに身を委ねながら、懐かしい車窓の風景をゆつくりと楽しむつもりでいた。ところが、思いもかけず、乗り換えに手間どり、三時間を予定していた旅がじつに十時間近い長旅におよぶことになった。そればかりか、駅員たちの投げやりで横柄な態度に、ドストエフスキーはめずらしく怒り心頭に発したらしい。『作家の日記』に彼はこう書いている。

「鉄道は公衆のために作られたのではなく、公衆が鉄道のために作られた」

四十年ぶりの領地訪問ともなれば、それなりに感慨深いものがあつたはずだが、この旅の印象は、『作家の日記』にも、手帳にも、創作ノートにも記されていない。わずかに残された文章から感じられるのは、どこか口ごもるような歯切れの悪さである。彼は書いている。この、「取り立ててどうということのない場所」が、その後の自分の人生にあまりに強い印象を与えたため、何度来ようにも足が伸ばせなかった……と。

ルハヴィツツイに向かう列車のなかでドストエフスキーは、一つの興味深い光景を目撃することになった。成り上りの紳士然とした父親と、最新流行の子供服

を愛らしく着こなした八歳ほど男の子の親子連れである。男の子は、コンパートメントの席に腰を下ろすなり、父親に向かつて言った。

「パパ、煙草ちょうだい！」

父親は取りたてて驚いた様子も見せず、ポケットから真珠貝細工の煙草入れを取り出し、子どもに差し出す。男の子は、車窓の光景を熱心に眺めいりながら、列車がわずかに駅走る間にじつに四本の煙草を吸いきってしまった。その間、父親は何ごとかぼんやりと物思いに耽るままだったという。ドストエフスキーは書いている。

「私は一生の間、このような父親に会つたことはないし、おそらくこれからも会うことはないだろう」。

そして彼は、ロシアにあまねく広がる「父親不在」の現実を嘆きながら、こう書き添えている。

「思うにそれは、現代の父親が自分の家族に対してあらゆる普遍的な理念を失つている点にある」と。

ドストエフスキーがこの日の領地訪問についてほとんど何も記さなかったのは、それなりの心算、心中に期するところがあつたからと見てよい。たとえ、『作家の日記』という私的な場であつても、手の内をさらしたくないというのが、彼なりの本音ではなかつたらうか。心中に期するところとは、いうまでもなく、大作『カラマーゾフの兄弟』の執筆である。ソビエト時代のドストエフスキー研究者グロスマンの編んだ詳しい年譜によると、この領地訪問で、彼は、小説の影の主人公ともいうべきスメルジャコフの母で、神がかりの乞食女子ザヴェータ・スメルジャーシヤヤのモデルとなつた女性に会つていらしい。もつとも、『作家の日記』の作者は、この小説のプランについては何ごととも触れずに、右に紹介した車中での子のエピソードから、当時、ロシアで大きな話題となつていたある裁判のエピソードへと話をつないでいる。

その事件とは、ロシア中部のとある地方裁判所で審理にかかつた幼児虐待の裁

判である。被告席に立たされたのは、ジュンコフスキーという中年の夫婦で、訴え出たのは、夫妻に仕える家政婦だった。被害者は、上から順にニコライ(十三歳)、オリガ(十二歳)、アレクサンドル(十一歳)の三人で、告発状によると、ジュンコフスキー夫妻は、長時間にわたって家畜小屋同然の部屋に子どもたちを閉じ込め、ある時は、拳で、ある時は馬用の鞭をふるい、暴行を加えつづけたという。当然のことながら、子どもたちには、ろくに食事も与えられなかった。裁判では、結局のところ、夫妻に無罪放免の判決が下った……。

晩年のドストエフスキーの時事的関心を余すところなく示す『作家の日記』は、当時の社会問題の中心の一つであった家庭崩壊の話題に多くの頁を割いている。長編小説『未成年』でその生態をつぶさに描きだした『偶然の家族』をめぐって、理論面から洞察を加えたのもこの『作家の日記』だった。その彼が、ジュンコフスキー夫妻の裁判に感じた大きな矛盾とは、次のようなものだった。たとえ、裁判で親と子の和解が成立したところで、子どもたちの心に残る傷、それはどのような形で未来に影を落とすことになるのか……

ルハヴィッツィに入るとまもなく、道路の右手に、ザライスクの町の方向を示す標識が見えてきた。ザライスクを文字通りに訳すなら、「天国の向こうへ」ほどの意味になるが、語源は遠く十三世紀のタタールモンゴル時代にさかのぼり、「ザラスク(一思いに死ぬ)」がなまってきているという。この語の正しい由来を、おそらくドストエフスキー自身も知っていたに違いないが、天国と死という、ある意味で、両義的ともいえる意味をになったこの町は、作家自身の父や兄と幼年時代の懐かしい記憶のみに結びついていただけではない。「罪と罰」の主人公ロジオン・ラスコーリニコフの故郷をこのザライスクに設定することを思いついたとき、ドストエフスキーの脳裏に、ほとんど劇的ともいえる深い啓示が訪れたことは疑いようのない事実なのである。

ルハヴィッツィを出ると、それまで平坦だったアスファルトの起伏がにわかに激しくなり、幾重もの皺をなして見えた草草が、一枚づつ目前に迫っては、均めさ

れていった。途中、左側の車窓に、今は荒れ放題の、集団農場の廃墟のような建物が現れた。ソビエト権力の夢を一身になった集団農場が破綻するや、ロシアの大地はあたかも太古の姿を取り戻したかのようだった。この風景は、十九世紀の昔から何も変わっていないのではないか――、思いがけず浮かびあがったそんな疑念に誘われるように、「移動派」と呼ばれる十九世紀のリアリズム画家たちの描いた農村を、目の前の風景に重ね合わせてみる。

午後一時過ぎ、車はようやくザライスクの町に着く。小高い丘の上に、まるでおとぎ話に出てきそうなカラフルな軒をまばらに並べた、人口四万を少し越えるばかりの小都市。中東帰りの運転手ミーシャに町の郷土史博物館に立ち寄ってくれるように指示する。ザライスクの教会にタチャーナという女性がいるから、ぜひその人に案内を頼みなさい――、モスクワにあるドストエフスキー博物館を訪ねたとき、一人の女性学芸員にそうアドバイスされていたのだ。教会を兼ねる博物館の木戸をくぐり、ザライスク訪問の意図を告げると、受付の女性は「ちよつと待つて」と言い残し、慌てて外に飛び出していった。

それから十分ほどして、明るく日焼けした顔の中年女性が入ってきた。亜麻色の髪を少年のようにカットした精悍な感じが印象的で、名前は、タチャーナ・ピリュコワといった。たがいにかんたんな自己紹介を済ませると、彼女は澄んだ青い瞳をきらきらさせ、堰を切ったように話しはじめた。ドストエフスキー家の元領地で、子どもたちが泥まみれになつて遊んでいるのを見るのが何よりの慰め、近々ドストエフスキーの幼年時代について本に著し、できれば博物館を整備したい、でも、なかなか資金が得られなくて……。

ザライスクの城壁から見おろした草地は、淡い緑と淡い褐色のピロッドの敷布を地平線まで波打たせ、「天国の向こう」という字解きをふと思いつきさざるをえないほど美しかった。地平線をさえぎるようになつて帯状に延びる森、森。

「ダロヴォーエはあの森の向こうよ。さあ、急ぎましょ」。

タチャーナの元気のいい声に急ぎ立てられるようにして車に乗り込むと、車は、

二度三度、前に突んのめるようにして発進し、乾ききつた坂道をスキーさながらの軽さで滑り降りていった。濛々たる土ぼこりが車の背中に巻き起こり、開け放った窓からどつとなだれ込んできた。

## 1-2 ダロヴォーエ

「女の夏」と、ロシア人が慈しみを込めて口にする九月初めの柔らかな光に被われたダロヴォーエ——。モスクワから南へ二五〇キロほど下ったトゥーラ県にあるこの小さな村が、ドストエフスキー文学の原点、あるいは発祥の地とも呼びうる由緒ある土地であることを知る人はあまり多くない。

濃い緑の木立にすっぽり包まれた博物館の館長が、案内役を買って出たタチヤーナだった。彼女には、長年の経験を生かしたガイドのノウハウがあるらしく、緑色に塗りあげたログハウス風の博物館の前を素通りすると、茫々と草が生いしげる果樹園へと私を導いた。

「ここでは、林檎や梨がたくさんとれたのよ」

両足からみつく草を掻きわけ、バッタや蛙をはらいのけながら草地をぬけると、先ほど車で脇をとおった貯水池が茂みの間から見えてきた。

「フェージャはこの池でよく泳いだんです」

ぐらぐらする渡り板の上で腰を落とし、ひんやり冷たい池の水に手を浸す。土の粒子が細かいせいか、透明といつても暗くよどんでいるのが分かる……

「あれがフェージャの森よ」

草むらに戻り、博物館の裏手にある木立に向かって歩き出した私に、ターニヤは息をはずませながら言った。

「ここで野蠻人ごっこをして遊んだのね。私の夢はね、世界中の子どもにも思う存分ここで遊んでもらうことなの。自然の尊さを知ってもらうためにね」。

兄ミハイル、弟アンドレイ、そして農奴の子どもたちと戯れる少年フェージャの

明るい声が森の奥からこだましてきそうな気がする。

木漏れ日を浴びながら、「フェージャの森」を抜け、土ぼこりの舞い上がる小道をさらに数分ほど歩くと、左手の草むらに、鈍色にひかる銅像が見えてきた。驚いたことに、モスクワの旧レーニン図書館前にある銅像と瓜二つのドストエフスキー像だった。作家の暗くこわばった顔だけでなく、湿った草地にどっかと居座った感じの銅像そのものが、草原の、開けつびろげな気分とどこかそぐわない。

「ターニヤ、チェルマシニヤーはここから遠いんですか」

「ここから二キロ、あの森の左手のほうよ」

心のあせりがふと声に出た。

ドストエフスキー家の領地は、グロスマンが書いていた記述よりも、はるかに美しく、緑に覆われた土地にあった。モスクワの博物館には、兄のミハイルが鉛筆でスケッチしたダロヴォーエの風景画がかけてあったが、興味深いことに、その絵には、池や、草地や、のどかにたわむれる牛たちの背後に、実際には存在しない山々が描きこまれていた。

うつむき加減のドストエフスキー——。ダロヴォーエは、少年フェージャにとつてはたして遊びの土地だったのだろうか。罪を知らない三人の兄弟たちは、この世のいつさいの穢れをまぬがれ、天使のように無邪気に戯れていたのだろうか。それとも、この無邪気さのかけには、後に『カラマゾフの兄弟』で明らかになる、兄弟同士の敵意や憎しみが隠されていたのだろうか。父に連れられて兄のミハイルと過ごした最後の夏、後年、父親の存在をとおして、原罪の地、汚れた土地として意味づけられるような経験がここで生じたのだろうか。そもそも、『罪と罰』の隠された主人公スヴィドリガイロフの領地がこのダロヴォーエに設定された事実は何を意味しているのか。

あるいは、名優モチャーロフの演技によるシラーの『群盗』にえもいわれぬ興奮を覚えてから、少年フェージャの心のなかにある種の固定観念にも似た罪の意識が生じることはなかったろうか。「フェージャの森」で野蠻人ごっこに興じる少年

と、この領地に原罪の忌まわしい影をみる後年のドストエフスキーを、どのような一本の糸で結びあわせればよいのか。

「この村で大火事があった、ほとんどの家が焼け落ちたのに、ドストエフスキー家だけが焼けなかったの。それは、この榎の木があったおかげ。でもドストエフスキーはこの榎の木が大嫌いだっただけ」

「榎の木が大嫌いだっただけ」というタチヤーナの言葉から、何か不吉なものが沸き起こってくる。榎の木と強烈な父権との同質性のようなもの……

だが、凝りにこったガイドぶりも、「現場」を見たいとはやる私にはいささかまだるつこく感じられた。私たちは暗く湿った裏庭を迂回するようにして、ようやく博物館の表玄関に向かう。

「ここにある椅子は家族が使っていたものなんです。農奴は椅子を使う習慣がありませんからね。このペチカ、とても小さいでしょう。なんと言っても別荘です。灰暗い部屋にひんやりと沈んだ空気が残暑の日照りを心地よく鎮めてくれる。およそ二十畳ある奥の居間には、美しい威厳に満ちたザライスタを描き出したカーンバスがタペストリーのように、掛けられている。」

「ドストエフスキー一家は、ザライスタまで馬車で買い物に出かけて行ったんですよ。」

ドストエフスキーにとつて、ザライスタは決して、丘の向こうに広がる未知の憧れの土地ではなかった。この家が、父ミハイルにとつては一つの隠れ家であり、快楽の園でなかったとだれが言い切れよう。当時、少年フェージャが、後に『地下室の手記』で言及される「初夜権」という、およそ時代外れの権利を父親が行使し、それをどこかでひそかに知るような体験に遭遇したことはなかったろうか。母親の死後、彼がこの屋敷で行った悪行について言及しているものは少なくない。たとえば、主人を殺したとされる農奴の一人エフィーモフにはカーチャという名の「情熱的な」娘がいたが、妻マリアの死後、父ミハイルはこの少女を手ごめにし

子どもを生まれ、子どもはほどなく死亡している。これらの事実を、少年フェージャがまったく知らなかったという保証はどこにもなく、それを知ることが、彼にとつて深い心の痛手にならなかつたという保証もない。私の妄想はどんどん膨らんでいった……

### 1-3 チェルマシニヤ

腕時計を見ると、すでに三時を回っている。このペースだと、私が今回の旅の最大のハイライトと考えている場所を見逃すことになるかもしれない。

案内役のタチヤーナを急かし、道に迷いながらようやく辿り着いたチェルマシニヤ（ところで、これまでの日本語表記チェルマシニヤは誤り）は、丸太造りの家が十数軒立ちならぶ小さな別荘地の趣きをなしていた。『カラマーゾフの兄弟』の世界が一拳に目の前に迫ってきた。といっても、ドストエフスキーがこの小説の舞台に選んだのは、大ノヴゴロドから百キロ南にあるスターラヤ・ルツサという古い町だった。ドストエフスキーは、その町に、スコトプリゴニエフスク（家畜追い込み町）という、奇妙きつな命を施しているのだが、面白いことに、その町から何露里か離れたところに、チェルマシニヤという村があつて、その森林がカラマーゾフ家の財産ということになっている。カラマーゾフ家の料理番スメルジャコフに、父親フォードルの殺害をそれとなく唆したイワンが、その結末を確かめることなく、一時身を隠そうと考えるのがこのチェルマシニヤである。ところが、イワンは、自らのそのひそかな欲望が実現されたかどうかを確かめることなく、急遽、モスクワに旅立つてしまう。これらのエピソードに『カラマーゾフの兄弟』の原点をなぞるテーマが露出していると、私はひそかにらんできた。父親と愛人の奪い合いを演じる長男ドミートリーは、チェルマシニヤの森林と引き換えに、三千ルーブルを手に入れようと奔走するのだが、この小さなエピソードにも、作家の原罪意識に通じる何かを明らかにするモチーフが含まれてはい

いだろうか。

チエルマシニヤールの村人たちからすれば、それこそは迷惑な申し出であることはまちがいがなかった。私に言葉をかける勇気がないのを見透かしたかのよう、案内役のタチャーナは、庭先で仕事をしている中年女性に思い切りよく声をかけた。その女性は、さしてとまどいの色をみせる様子もなく、重たげな腰をあげてから、ドストエフスキーの子孫を知る老人が住んでいるといつて、斜向かいの家を指さした。ここではどうやら、ドストエフスキーは今なお昔なじみの隣人らしい。

「ヒョートル・ミハイロヴィチ・メーリホフ——九十歳を越えるこの老人は、白いやにをいっばいに溜めた両目を宙に泳がせながら、十月革命前後に、ドストエフスキー家の子孫からロシア語の読み書きを習ったと自慢そうに話しはじめた。

『ドストエフスキーの父親は、どこで、どうやって殺されたのですか』というタチャーナの、ぶつきらぼうな問いにも、少しもひるむ様子を見せず、まるで台本を読むような律儀さで答えはじめた。

「わしが聞いたのは、こういう話じゃ。父親の殺害を企てたのは、チエルマシニヤールに住む農奴たちで、全部で三人じゃった。父親が楡の木をそばを通りかかったとき、三人がいつせいに襲いかかったんじや。証拠を恐れたのか、殴ったりはしなかったので、外傷はなかったらしい。三人は、ウオツカを「瓶用意しておいて、それを主人の口に流し込み、布切れを詰めこんだんじや……」

一七〇年前の事件を、まるで目撃者のような自信たっぷりな口ぶりで話しつつづける老人の姿を見るうちに、私は「瞬、シャーマンの声に耳を澄ましているような錯覚に陥る。

「ヒョートル・ミハイロヴィチ、その楡の木といふのはどこにあるんです？」

「それがもうなくなっちゃったんじや。戦後まもなくのことだが、このあたりの森がぜんぶ伐採されおつてな、その時あつた楡の木も伐りとられてしまつたのじや」

老人の脇に立つて、興味がてらに話を聞いていた娘さんが口をはさんだ。

「あとでそのあたりをご案内します」

その時私はふと、ドストエフスキーが晩年に『作家の日記』に遺した小品「百姓マレイ」の話を思い出した。

「おじいさん、昔のあたりには狼が出たんですか」

「出たとき。何年前にも一度、狼が出てきて撃ち殺された」

私たちは車には乗らず、メーリホフ老人の娘の道案内で、ドストエフスキーの父親が殺されたという、かつて楡の木があつた雑草地に向かつてそぞろ歩きをはじめた。

## II 二〇〇二年十二月

### II-1 モスクワ——大ノヴゴロド

「かつてこれほどに重く、気の滅入る旅を経験したことはなかった」

ロシアの大地を旅するということは、時間と空間の縫い目を、蟻のように這いまわることだ。全行程わずか一週間足らずのつかのまの旅となれば、欲をかくことが禁物であることぐらい、だれもがわかっている。だから、レーニン図書館での成果など、ほとんど何一つ期待してはいなかった。そもそも、零下二十度の凍てつきが襲つたばかりの町で、資料探などできるはずがない。だから、三ツ星にしては住み心地満点というホテル・ブタバレストに箆城し、パソコンの白い画面とにらめっこしながら、少しでも原稿に手が入れることができれば、それで御の字となんてはならない。数日、寝たり起きたりの生活を繰り返かえせば、日頃の睡眠不足を取りもどすよい機会にもなる……

機内でのやり場のない時間、書きかけの原稿を取り出しては赤を入れる。その作業にもたちまち飽きると、さして興味のない機内誌に目をやったり、高度や速度を示す正面のテレビ画面を眺めては、モスクワでの昔の留学生生活をぼんやり思

い出したりしている。機内で読もうとコピーしてきたウラジミール・ソローキンの戯曲『ドストエフスキー・トリップ』などとうていひもとく気にもなれない。それにしてもなぜ、これほど心が踊らないのか。ロシアがソビエトではなくなったからか。あるいは友人たちが、みな、年若い、酒も飲まなくなり、金稼ぎに身をやつしているせいだろうか……

案の定、モスクワでの成果はほぼ無きに等しく、レーニン図書館の地階にあるコンピュータ室で探し当てたことのできたいくつかの目新しい資料も、一点たりともお目にかかれなかった。残された望みは、ドストエフスキー詣りだけとなった。

十一月一八日午後九時二十分、大ノヴゴロド行き overnight 列車は、まるで猫のような忍び足でモスクワの夜をすべるように動きだした。同室になったビジネスマン風の中年男は、そそくさとバジャマ姿に着替えるや、黒い革張りのアタッシュケースからスコッチのボトルを取り出し、サイドテーブルに用意されたバック入りの朝食をつまみに、備えつけのグラスで黙々と飲みはじめた。いつから、ロシアの夜行列車はこうも無口で無愛想になったのだろうか。ソビエト時代の夜行列車といえば、もっと華やいだ空気が漂っていたではないか。そもそも、スコッチを飲むといった習慣さえなくて、飲み物といえば、ウオッカかビールが決まりだったはずだ。すべてがお金の世の中になって、ソビエト時代のよいものがすべて失われた、そんな漠とした思いにからめとられたまま、ウラジミール・ソローキンの戯曲『ドストエフスキー・トリップ』のコピーをスーツケースから取り出し、枕もとのランプの灯りのなかに引きこもる。

七人の薬物中毒の男女が苛立ちながらドラッグの売人を待っている。ドラッグといつても、彼らのいま必要としているのは、通常の麻薬ではなく、文学作品という麻薬である。セリヌス、クロソウスキ、ベケットあたりが巷では最強のドラッグとみられているらしく、フローベール、モーパッサン、スタンダールなどフランス古典はいわゆる口直し用ということになっている。登場人名たちの役割から判断すると、どうやら、私らが二十代だった三十年前の日本の文学趣味が今のロシア

のそれに合致しているらしい。ドラッグの使用法は、世界各地にあれこれ分布しているらしいのだが、その複雑な処方えり分けける手際のみごときは、文学依存症ソローキンの端倪すべからざる博学をみせつけるものだ。何よりも面白いアイデアは、劣悪なドラッグの中和剤として、スターリン時代の不条理作家ダニール・ハルムスが推奨されていることである。マレーヴィチの絵にも似て、人間の臭いといったものをことごとく脱臭させた小説なら、たしかに、悪夢まがいもユーフォリアもどきも一気に消しやるかもしれない。ロシア風トリップの処方としては、ナポコフ、プーニン、ペーレイ、ジョイスとつなぐやり方がある。そんなとりとめもない話にかまけているうち、いよいよ、売人が登場し、登場人物七人分にふさわしい作家ドストエフスキーのドラッグが持ち込まれる。こうして七人の登場人物たちが、この珍奇なドラッグをとおして経験し、共有する世界が、ドストエフスキー・トリップというわけだ。

最初に現れる幻覚が、『白痴』の二場面で、ナスターシャ・フィリップポウナの家で催される有名な夜会の席である。はじめ、原作に忠実に場面は展開するのだが、やがてトリップは振れ、主人公たち二人一人がグロテスクな変容をとげはじめ。守銭奴のガーニャは、巨万の富を得てエヴェレストの頂上に城を建てることを夢み、黙示録博士ことレーベジェフは、巨大な鋼鉄の豚になって世界中のどぶ水や富者の靴底を舐めてまわる。結核病みで自殺するイッポリートは、科学技術を駆使して新しい肉体を作り、歓喜とオプティミズムの喧伝者となる。ナスターシャへの破滅的な情熱の虜となったロゴージンは、狂信的な去勢派どころか、世界の女たちと交わつては次々に妊娠させるという事業を企てる。では、公爵キリストたるムイシキンはどうか。彼は自分のすべての神経にヴァイオリンの弦を結びつけ、世界の孤児たちに『世界の痛み』の調べを奏でさせる…… なんだか、マヤコフスキーの詩を思わせる妙にセンチメンタリックなところが、面白い。ところが、幻覚はやがておぞましくもグロテスクな夢をあざないはじめ、主人公たちは一人一人が自らの過去のトラウマを語りはじめ。あのソローキンがよくぞここまで、と

感慨を新たにする。友人に惚れ直すとは、このことだ。

通学の途中、電車のなかで性的ないたずらをされた少年、猟犬を死なせ、父親に尻を叩かれた少年、隣人の男色シーンを目撃した少女、母親との近親相姦にふけた少年……。登場人物全員が、舞台の上に沈むなか、戯曲全体は、売人と化学者の次のような台詞のやりとりで締めくくられる。「もうこれで三回目だぜ。何度繰り返しゃ気が済んだ……しまいにや客がいなくなつちまうぞ」……これで実験段階は終了さ。はつきりしたよ、ドストエフスキーを生で用いるのは死につながるってな」「どうするんだ」「薄めるんだ」「なにで」「そうさな、ステイヴァン・キングでも使つて様子を見るか」

友人のソロキンがいかにトラウマの問題に取りつかれ、その果てしない補償の試みとして文学をとらえ、小説執筆に関わってきたかを私は思っていた。彼こそは二世紀のドストエフスキーと呼ぶにふさわしいといつかからか真剣に考えるようになった。全体を読みとおすのに、もの一時間とかならなかつた。少しぬるくなった缶ビールに口をつけると、目の前に、ナチス包囲下の町で死肉のカツレツを売る双子の兄弟のイメージがちらつきはじめた。ソロキンは限りなく残酷な夢にふけることで、自らのトラウマを癒そうとしている。ドストエフスキーもまた、同じような一面を持っていたにちがいない。

夜間、列車はチュードヴォという町で転轍の作業を行い、不気味な機械音を澄み切った夜の闇に響きわたらせた。私は横になったまま、体をねじつて外に目をやったが、そのまま再び浅い眠りに落ちた。私が乗っている列車は、午前五時過ぎに大ノヴゴロド駅に到着し、ウラジスラフという長身の運転手の出迎えを受けた。裸電球がわびしく照らし出す薄闇のなかに、抱擁のシルエツトがいくつか浮びあがる。大ノヴゴロドといえば、記憶する限り、エイゼンシュテインの映画『アレクサンドル・ネフスキー』のいくつかのシーンで観た覚えがあるだけだ。しかし、あれはほんもの大ノヴゴロドを撮った映像だったろうか。市の中心部を流れるヴォルホフ川のほとりで、ニコライ・チェルカーソフの演じるネフスキーが、漁を終え

て岸边に戻り、モンゴル人のハンと明るい声で渡りあうシーンが記憶に残っている。ネフスキーはまもなく、ドイツ騎士団との戦いに向かい、チュードオ湖の戦いで難敵を倒し、大ノヴゴロドに凱旋する。一九三〇年代後半に作られたあの映画は、迫り来る独ソ戦の予感をみごとに写しだし、ネフスキーには独裁者スターリンが、スプレマティズム風金属の仮面をかぶったドイツ騎士団には当然のことながら、ナチス・ドイツが二重写しされていた。

夜も明けないこんな早くから、スターラヤ・ルツサに向かうのか、と心配して尋ねると、ウラジスラフは、「ホテル・ヴォルホフに向かう」と明るく笑った。ドストエフスキー博物館が開くまでに五時間近くあるから、ひとまずホテルで待つてもらおう、部屋はすでに予約済みだが、よいか、との答えだった。

ドストエフスキーの本を書こうと思ったつてから、私はいつしか、『カラマーゾフの兄弟』の舞台となったスターラヤ・ルツサの町を訪ねることなく、本は完成しないとと思うようになった。一年前の夏、ダロヴォエ、チェルマシニヤを訪ねてから、その思いはさらに強まり、最後の章は、スターラヤ・ルツサ紀行で締めくくろうと考えた。『カラマーゾフの兄弟』の世界は、イワン・アイリエフというソビエト時代の監督が愚直なまでのリアリズムで描ききった長編映画で強烈すぎるくらい記憶に刻まれていて、ひよつとすると、死ぬまでそのイメージに付き纏われるのではないかと不安にさいなまれたこともある。その映画が撮影された場所が、スターラヤ・ルツサではなく、おびただしい数のクーパーを煌めかせる、かつてのザゴールスク（現在のセルギエフ・ポサード）であること知ったのは、つい最近のことだった。もつとも、アイリエフのこの映画が私はなぜか好きで、ヴィデオやDVDで繰り返し見てきたのにも理由があった。父フョードル役を演じるマルク・ブルードキンと、スメルジャコフ役のワレンチン・ニコリーンの二人の、絶妙といふしかない演技力である。舞台役者として知られた彼らは、かたや色欲と金の亡者かたやシニシズムの権化ともいふべき二人になりきり、吐き気がするほどにいやらしい役柄をじつにみごとに演じきっているのだ。ところが、この映画のラストシー



ンは、なんだか驚くほど力強く、自己犠牲のテーマをめぐり、感動的な盛り上がりを見せる。不思議な変化だと薄々感じていたところ、じつはブイリエフはこの映画の製作中に死去し、ドミートリー役のミハイル・ウリヤノフとイワン役のキリル・ラヴロフが一致協力して最後まで完成させたということもつい最近になって知った。吹雪のなか、シベリアに旅立つミーチャとグルーシエンカを見送るあのシーンは、映画のよしあしを越え、文句なしに見えるものの心を捉えて離さない。

そう、父殺しの罪を引き受けるという犠牲を、長男ドミートリーは引き受ける。ドミートリーこそはおそらく、もつとも人間くさい現代のキリストであるにちがいない。発狂したイワンや自殺したスメルジャコフに代わつて、犠牲という宿命を彼はみずから背負い、シベリアへと旅立つ。一八四九年十二月、それこそ「無辜」の罪を背負つてシベリアに旅立ったドストエフスキー自身の姿がそこにある。だが、ドミートリー同様、彼自身もまた、父親への憎悪と父親の死を願望するという罪によつて罰を受けなくてはならなかった。愛人を争い、父親の死を願うドミートリーと、社会主義の理想に駆り立てられたドストエフスキーが二重写しになる。ドストエフスキーがこの罰を不当と感じなかつたのは、彼がそれまで苦しめられてきた原罪に対して、どれほど小さな罰であれ、受け入れなければならないという意識にもとづくものであつたからではないか。しかし、今回のスターラヤ・ルツサ詣の最大の目的は、ダロウオーエールチェルマシニヤート、スターラヤ・ルツサースコトプリゴニエフスタを結びつける見えざる糸を探り当てることであつた。

## II-2 大ノウゴロド——スターラヤ・ルツサ

午前十時少し過ぎにホテルを出た私たちの車は、篠つく雨のプスコフ街道をまっすく南西に向かつて走りはじめた。煙のような雲がまるで人攫いのように地面を睥睨し、フルシチョフカと呼ばれる五階建てのアパートを二呑みしてしまいうな気配だつた。私がこれまで経験した旅のなかでも、記憶にないくらい悪い悪天

候だ。地図を見ると、左手にイリメニ湖が見えるはずのだが、地面すれすれを這う雨雲のせいでそれらしき姿はなかなか現れない。間違えて走っているのはいか、と少し不安な気持ちになる。目計りで幅およそ二十メートルの舗装道路にはほとんど行き交う車もなく、道路脇に細りきつた白樺の幹がちらほら生えるのが見えるばかりだ。

ソビエト崩壊後のロシアをめぐる旅には、常にどこかしら、地獄めぐりを連想させるものがある。マヤコフスキー流にいう、「幸福を製造する工場」の廃墟が、右手斜め前方に見えてくる。作つては壊し、壊しては作りの作業を繰り返すうちに、この「工場」の住人たちは、まともな建物を拵える最低限の知識すら忘れてしまつた。正面の看板に「ウブラヴレーニエ・メハニザーツイイ(技術監督局)」と書いた建物の壁には、枝分かれしたひびがあり、それを隠すために黒のペイントが塗られ、その壁の向こう側からは黒い骨格がむき出ししている。これから十年も経ち、西側資本のビルや「新ロシア人」たちの別荘が現れば、ソビエト時代のユーロピア建設がいかに幼稚で、ずさんなおとぎ話であつたかがわかるだろう。

それにしても、ソビエト時代に建てられた家屋がどれもこれも監獄に見えてしまふのは、なぜなのだろうか。桁はずれに広すぎる大地とのコントラストのせいだろうか。でも、ロシアの人々は、酷薄な自然から身を守るためにも、みずから進んでその「監獄」に入り込まざるをえなかつた。ともあれ、この、箱型のアパートを見ていると、ポストモダンの批評家たちが、自分たちの歴史をめぐつてつとに自嘲をこめて「空」と呼ぶ理由も見えてくる。大地の上に流れていく時間のおぞましい水圧と、人間の命の短さのコントラスト——。男子の平均寿命五十歳後半というデータこそ、ロシアに流れる歴史の「空」性を、なによりも如実に裏づけるものではないか。

プスコフ街道をおよそ二十キロも下つたらうか、レスナーヤという標識が見えたあたりで、運転手のウラジスラフが「トルフ」と大きく声をあげた。見ると、褐色に染まつた樺木の茂みの向こう側がところどころ黒く盛り上がり、白い煙を吐

き出している。

「地面が焼けてるんだ」

ウラジスラフの話だと、そのあたりの地表温は、二、三百度あり、とても近づけないという。今年の夏は、例年になく猛烈な早魃が襲ったので、いつもよりトルフがひどく、一面煙に包まれ、道路も寸断された。褐色の枯野を真つ黒に焦がしているのがそれで、タバコ二つで大火事になるから、森の中に入ることは厳重に禁じられているという。

「ここはね、ブレジネフ時代は沼地だったんだよ。ウズベクから大勢人がやってきた。三から四年間もいたろうか。ウズベクは綿花栽培の土地で、早魃対策は手のものだからね。根を切り、石をとって、なんとか干拓して土地を乾かしたんだ」  
車はやがて滑らかに左折した。スターラヤ・ルツサまで四七キロとある。

「ここにはエカテリーナ時代にも道があつてね、女帝みずからスターラヤ・ルツサ詣でしたんだ」

この、果てしなく広い大地と比べて、限りなくちつぽけであるはずの人間が、なぜ、あれほど大きなドラマを生み出すことができたのか。カラマゾフ事件は、ロシア全土を揺るがしたとドストエフスキーは書いている。だが、空間の圧倒的なボリュームを前にすると、『カラマゾフの兄弟』の人物たちは、遠近法を欠いている分、場違いな大きさを印象づける。小説という怪物、それはたんに登場人物の数や物語の長さに限られるわけではない。そもそも登場人物が、大地の広さに比して、不釣り合いなほど大きすぎるのである。

凍結したイリメニ湖が、左の車窓に切れぎれな姿を現しはじめた。動かない湖ほど異様なものがあるだろうか、と私はなんの脈絡もなしに考えはじめた。雲はうごき、雨は落ち、草木は風になびいているのに、湖だけが、まるで無機物のように、死んだように動かない。

ウラジスラフの陽気な声がひびく。

「どうだい、生きた水を試す気はないかい」

「大いにあるね」と私は答え、停車した車のドアを勢いよく押しだした。

街道から二十メートルほど離れたところに、石の十字架がたち、その向こうに小さなお堂が建っているのが見えた。大雨のなか「生きた水」もないか、と一瞬とまどいを感じたが、すべては思い出のためと割り切った。後ろから、私を呼び止めるウラジスラフの声がひびいてきた。手に空のペットボトルを携えている。何か幸運が起ることを期待できるかもしれない。

スコトプリゴニエフスク(家畜追い込み町)——。ドストエフスキーはなんとも忌まわしい名前を採用したものだ。なぜ、実際の名称を用いなかったのか……

スターラヤ・ルツサの市街地に入つてしばらくしてから、車はやがて、敷石をアスファルトで固めた河岸通りに入つた。ウラジスラフは車を徐行させ、上目づかいに二つ二つ番地を確かめていく。やがて、左手の前方に、深緑色をした二階建ての建物が見えてきた。「あれが、たぶん、博物館だ」と彼は言い残し、車から出ると、建物の二階を上げ上げと見上げながら、雨に濡れるのもいとわない様子で歩き出していった。

木戸を開かないらしい。しばらくして、あきらめた様子でウラジスラフが、首を横に振りながら戻ってきた。察しがついた。なんということだろう。うかつにして今日が月曜日であることを私はまったく忘れ果てていた。

「何とかしよう」ウラジスラフは真剣な顔でそう言い、近くの中学校まで車をしばらくバックさせると、そこに車を止め、校舎のなかに姿を消した。十分、二十分と、どんどん時間が経っていく。青いペンキを塗った窓枠の外には鉄格子がはめられていて、夜間の部外者の侵入を防いでいる。夜のスターラヤ・ルツサはよほど物騒なのだろうか。教室からハンマーで工作する音が響いてくる。ウラジスラフが校舎のなかに消えてからかれこれ三十分はたつた。雨足も弱まってきたので、私は車をおり、ピンク色に染め上げられた校舎にかかっている一枚のプレートを目を凝らした。「ドストエフスキー記念第二中学校」とある。そのプレートを写真に収めてから、ゲオルギエフスカヤ通りとある道を少しばかり散歩しはじめ

た。遠くに教会の青い丸屋根が見えた。

ウラジスラフは何を粘っているのだろう。遅ければ遅いほど、それだけ話が進んでいるということだろうか。まもなく、教頭を務めるらしい中年の女性と一緒に姿を現した彼は、私にこう説明した。館長は仕事を休んでいる。母親が病氣らしい。副館長に鍵を預けているらしいのだが、その副館長もじつはここから三十キロほど離れた別荘に行っていて不在らしい。まずは、館長のアパートに立ち寄り、副館長の詳しい住所を聞いてみよう。話は、二重にも三重にも込み入っていて、博物館の鍵がいまどこにあるのか、わからなくなった。

教頭の中年女性を乗せた私たちの車は、ゲオルギエフスカヤ通りを左におかれ、市内のメーンストリートを抜けてから、公団風のアパートの前で停車した。まず彼女がアパートのなかに消えた。戻ってくるのを待つ間、ウラジスラフがぼつりと言葉をはいた。

「ここはまるで一九三〇年代だな。ひどいもんだ」

「スターリン時代ということかい」

「ああ」

その一瞬、私は、アレクセイ・ゲルマン監督の『わが友ラプシン』で見たスターリン時代の農村の一光景を思い出した。スターリン権力が恐れ、社会主義リアリズムが禁じた「自然主義」を、もろにさらけ出してみせた映画だったが、灰色の下にたたくむスターラヤ・ルツサの景色は、まさにこの『わが友ラプシン』のモノクロ世界のように無骨で刺々しい。その殺伐とした雰囲気は、戦後復興の失敗によるものだろうか。かりにそうだとしても、町の景観を破壊したのは、ドイツのファシストだけではない。共産主義者たちもまた、荒廃に手を貸しているのだ。でも、どちらが果たして正しい選択だったのか、農奴制をユートピアに変えようとした理想か、自然の変化になすがままの成長だったか。ロシアの歴史が永遠に抱えつづけるアポリア――。

緑色の鉄のドアが開き、教頭の女性が現れた。ウラジスラフが頭を横に振り

ながら、車に近づいてくる。肝心の館長は、所用で大ノヴゴロドに出かけていて、不在らしい。片道百キロの道を引き返し、またここに戻ってくるわけにはいかない。夜の九時過ぎに出る列車に間に合わないかもしれない。ウラジスラフはタバコの煙を吐き出し、どうしようもない、と二言いつてから、運転席に着いた。

苦肉の策ですが、と、教頭の中年女性は、郷土史博物館のあるスバツソ・プレオブラジエンスキー修道院に行くよう私たちに勧めた。その館員を紹介してくれるという。私たちは曖昧にうなづき、彼女を中学校まで送り届けてから、修道院へ車を走らせた。大ノヴゴロドで二泊し、明日に再度の挑戦というシナリオも頭に浮かんだが、外国人にはすべてががんじがらめのロシアで、旅程を変えることほど危険なことはない。

## II-3 散策

十二世紀末にまで遡る古い歴史をもつスバツソ・プレオブラジエンスキー修道院は、雨上がりのひんやりした空の下で、ひときわ鮮やかにクーボルを輝かせていた。修道院の一部は郷土史博物館をかねているらしくて、そこで一通り、町の歴史を学ぶことができる仕組みになっていた。案内役を買ってたりュドミラという名前の女性は、何を勘違いしたのか、いきなり、十世紀末にヴィザンチンからキリスト教を受容した経緯から話をはじめたので、私はいささか面食い、しばらく様子を見てから、婉曲に訪問の意図を伝えた。すると、彼女は、自分がかつてドストエフスキー博物館のガイドとして働いていたことがある、と言ってにわかに目を輝かせた。

町の説明を途中で切り上げてもらい、私たちは一緒に外に出た。車には乗らなかった。私はまず、ドストエフスキーほどの経路を辿ってスターラヤ・ルツサにやつてきたのか、を尋ねた。

「サンクトペテルブルグから、ソーセンカという駅まで列車できて、それからヴォ

ルホフ川沿いに蒸気船で大ノヴゴロドまで下つて来たんです、大ノヴゴロドからはイリメニ湖に出て、そこから湖を渡つて南岸にあるロバチという村にたどりつき、ロバチからはポリスチ川を通つてスターラヤ・ルツサまでやつて来たの」

手帳の字がくしゃくしゃになるのをちらりと見ながら、案内役の女性はかまわずに早口で説明をつづけた。

「でも、スターラヤ・ルツサに鉄道が敷かれてからは、それを利用するようになつたわ」

リュドミラの話によると、冬はイリメニ湖が凍結するため、鉄道のかわりに駅通馬車を使うこともあつたらしい。そこで彼女は、『カラマーゾフの兄弟』の「モークロエ」の章を読んで御覧なさい、よく描かれていますよ、と言ひ添えた。

「ペテルブルグからスターラヤ・ルツサまで時間はどれくらいかかりましたか？」

「そうね、八時間から九時間ぐらいたつたかしら」

「当時、スターラヤ・ルツサの人口は」

「二万人足らずね」

第二次世界大戦中、ドイツ軍によつてスターラヤ・ルツサは破壊された。鉱泉地として知られた町の古風なたたずまいは消え、残されたのは、町の中心の広場にある双頭の鷲の銅像だけだつたという。双頭の鷲は、ナチス・ドイツと同じ紋章であつたばかりか、その銅像はドイツ人の彫刻家が建てたものであつたためらしい。博物館で買つた絵葉書の写真で見ると、十九世紀のスターラヤ・ルツサは、たしかにチェーホフの小説の舞台になりそうな古風で小粋な雰囲気を見せている。

「ドイツ軍の攻撃で、ドストエフスキーが住んでいた家も、窓ガラスもドアもなくなつてしまい、骨組みだけになつてしまつたの。解放軍がルツサの駅にやつてきたとき、ルツサの駅からドストエフスキーの緑色の家が見えたという記録もあるわ」

リュドミラのガイドぶりは見事だつた。ドミトリーの最初の恋人カチエリーナが住んでいたという商家の前を通り、博物館が面するペレリチツァ川を隔てて、

グルーシエンカの屋敷を望むことができた。あの運命的な夜、激昂したドミトリーが「殺してやる」と叫んで走りぬけた道もかんとんにたどることができた。ペレリチツァ川に面するグルーシエンカの館からソポールヌイ橋を渡り、ドミトリーエフスカヤ通りに入った。小説ではスメルジャーシチャヤ川と呼ばれているマラーシカ川の小橋をわたり、人気のないミーニンスキー横町に出て、主人公はいよいよカラマーゾフ家の垣根をよじ登るのである。

「それが面白いことに、スミルノフという研究者に言わせると、カラマーゾフ家の屋敷は、ドストエフスキーの住んでいた家ということになるらしいの」

とすると、カラマーゾフ家とグルーシエンカの家まではわずか数百メートルの距離ということになる。

「建物の構造からいつても、たしかにそうしかいえないと思います」

『罪と罰』では、主人公ラスコーリニコフの故郷にザライスクを設定したように、ドストエフスキーは地理的な場所のもつ象徴的な意味にひどくこだわる人であつたし、『カラマーゾフの兄弟』を構想中、「反論できない決断をした」と二八七六年に書いてから、スターラヤ・ルツサを見る彼の目は大きく変わった。手に入れた自宅がカラマーゾフ家の屋敷であるというのも、大いにうなづける話である。ところが私は、その肝心の屋敷に入れず、周りをうろろろし、家屋の内部は想像するしか手立てがない。

面白い説明を聞いた。初耳だつた。一八七二年の五月にスターラヤ・ルツサにやつてきたドストエフスキーは、その後、三軒ほど住まいを変えるが、そのうちの二軒目は市の中心部にあるイリインスキー通りに面していたという。たしかに、この時期、『未成年』の執筆に没頭しているはずの作家の手帳には、突然次のようなメモが現れている。

「一八七四年九月十三日。ドラマ。トボリスクで。二十年前。イリインスキーの物語に似たようなもの。二人の兄弟。老父。一人には許婚があり、その女に弟がひそかに横恋慕している。しかし、彼女は兄を愛している。それなのに、兄の、

若い少尉補は飲んだくれては馬鹿なまねをし、父親と喧嘩したりする。父親が姿を消す。数日間、消息がとだえる。兄弟が遺産の話し合いをしている最中、突然、官憲が地下室から死体が掘り出してくる。長男に証拠が突きつけられる(次男は一緒に住んでいないのだ)。長男は裁判にかけられ、懲役を言い渡される……」

このメモは発生段階での『カラマーゾフの兄弟』のありようを示しており、言及されている兄は多くの場合、イリインスキーとなっており、その表記は、その後、ドミートリー・カラマーゾフの名と併用して用いられることになる。

ところで、トボリスクといえば、ドストエフスキー自身にもひときわ強い記憶の残る町である。一八四九年の十二月、足かせをはめられたまま、シベリアの流刑地に向かった彼が、翌年のはじめ、他の囚人たちと最初の休養を与えられたのがこのトボリスクであり、彼はまたこの町で、デカブリストたちの妻から、聖書のプレゼントを受けた。同時に、オムスクの監獄で出会った「父親殺しの男」イリインスキーの故郷がやはりこのトボリスクなのである。右の引用を、『死の家の記録』の次の一節と比較してみると面白い。

「彼は貴族の出で勤めもあり、六十歳になる父親のもとで道楽息子のような生活をしてきた。その振る舞いは無軌道この上なく、借金に首まで漬かっていた。父親は彼を抑えようとしていざめたが、父親には屋敷と郷があり、……息子は遺産欲しさに父親を殺した」

周知のように、『死の家の記録』の発表から二年後、作家はシベリアから一通の手紙を受け取り、オムスク監獄で出会った「父親殺しの男」はじつは無実だったことを知るにいたった。

スターラヤ・ルツサは、二度目の転居の時から、「スコトプリゴニエフスク」(家畜追い込み町)の奇妙な名前と呼ばれはじめていたかもしれない。語感からして耳障りのする人好きのしない名前だが、妻アンナの回想によれば、ルツサを流れるマラーシカ川のほとりに「馬市」があり、そこで家畜たちを売る人々の活気にあふれる声が響いていたという。

『未成年』の執筆と並行して徐々に彼は『カラマーゾフの兄弟』の世界へと近づいていった。だが、このイリインスキー通りという名称にもまして、『未成年』を執筆中のドストエフスキーを驚かせる事件が起こる。スターラヤ・ルツサで起こっている。ピョートル・ナザロフという男が盲目の父親を殺した事件である。当時ドストエフスキーはひどくこの事件に興味を持ち、町の住人に根掘り葉掘りその実情を尋ねまわったという。ドストエフスキー一家がルツサを去ってまもない九月二十日に行われた裁判では、この父親殺しの男に終身刑が下された。

スターラヤ・ルツサとの関連でさらに興味深い事実の一つに、フォン・ゾーン事件がある。彼が最初に間借りした二階建ての家の近くに、同じフォン・ゾーンという元陸軍少佐の一家が住んでおり、数年前に死んだ一家の主は、モスクワで起った猟奇事件の被害者とよく似ていたばかりか、『カラマーゾフの兄弟』の父親フォードルともあまりに酷似していたため、小説を読んだルツサの住人たちは一様に仰天したという。

## II-4 イリメニ湖のほとり

私たちの車は、イリメニ湖のほとりにあるブレイギという村をめざしてひた走っていた。ドミートリーとグルーシエニカが乱痴気騒ぎに興じるモークロエの村が、じつはこのブレイギという村をモデルにしていると聞いて、いざ行け、とばかりにスターラヤ・ルツサを後にしたのだ。小説を読み返すと、スコトプリゴニエフスクから二四露里と書いてある。

ドミートリーを乗せたトロイカは、「空間をむさぼり食いながら」ひた走った。雪のなか、橇を走らせて、モークロエへ駆けつけた道を、私たちは百キロを越えるスピードで向かっている。ブレイギという村の手前にあるウストレカという漁村は、『悪霊』の舞台の一つとされる場所で、ウスチエヴォと呼ばれている。ステパン・ヴェルホーヴェンスキーが最後の遍歴に出る村である。夏、スターラヤ・ルツサに

通じるポリスチ川が涸れ、蒸気船の運行がなくなると、ドストエフスキーは湖畔にあるウストレカから馬車で町までやつてくることもあったという。

ウストレカが近づくと、車の左手に湖が見えはじめ、それはしだいにパノラマ全体を支配するようになった。灰色の雲の下に広がる湖は、もう「凄絶」という月並みな形容詞しか浮かばないほど美しかった。すぐにもカメラに収めようとしたが、幸か不幸か、フィルムはすでに切れていた。こうなったら、記憶の力にたよるほかない。しかし、記憶にも自信がなかったため、私は手帳をとりだし、湖のスケッチをはじめた。これもまたはじめての経験だった。

ウストレカに戦没者の記念碑がある、と聞いていたので、道行く老人に尋ねると、そんなものはないと答える。

「歴史家のほうが何でも知っているんだ」

ウラジスラフが苦笑する。ウストレカからさらに車で十分ほど道を行くと、修復中の鉄骨を雨にさらし、箱型の建物に二つの頭をつきだした聖堂が見えてきた。あたりにはやはり黒々とした農家が点在している。大ノヴゴロドに行く馬車駅と旅籠がある町といえば、たしかに、修道院のガイドが言っていたブレイギしかない。ブレイギの町は、イルメニ土と呼ばれる高さ十数メートルの小高い堤で知られるらしい。聖堂が建てられたのは十七世紀のことで、人口は二千ほどだったが、この「湿った村」は、今や、七百人の村人を数えるまでに廃れている。モークロエの夜の湖の湿った空気と、ブシジャ川の霞がこの村を覆っていたことだろう。夜空を仰ぎながら、グリゴリーの無事を必死に祈るドミートリーの背中に、凍結したイリメニ海が広がっていたなど、だれが想像してきたろうか。ドミートリーが逮捕された朝も、今と同じように、雨の降りしきる朝だった。途方にくれ、自殺に思いをよせる場面を、ドストエフスキーは次のように描写している。「窓のすぐ下にぬかるみの道が見え、その先は雨でいちだんとくろろずみ、哀れさを増した、どすくろい、貧しい、みすばらしい百姓家が、雨霽の中に並んでいた」。そしてドミートリーは、みずからの死に思いを馳せながら、「たぶん、こんな朝のほうがふさわ

しかったかもしれない」と思う。

では、問題のチエルマシニヤーはどこにあるのか。『カラマーゾフの兄弟』には、父親フォードルが息子のイワンにしきりにチエルマシニヤーに行くことを懇願する次のような場面がある。

「お前にとつちやヴォロヴィヤ駅からちよいと左に入るだけじゃないか。せいぜい十二キロかそこらで、チエルマシニヤーだからな」

「とんでもない、だめですよ。鉄道まで八十キロもあるのに、モスクワ行きの列車が出るのは晩の七時なんですからね」

チエルマシニヤーはたんに空想上の村にすぎなかったのだろうか。ドストエフスキーは、自分の父親が殺された領地とスコトプリゴニエフスクを彼は意識的に混乱させたのだろうか。

右の引用でイワンが「鉄道まで」といつているのが、大ノヴゴロドであることは間違いない。ただし、ヴォロヴィヤなどという名称などは地図のどこにも載っておらず、駅は駅でも「馬車駅」のことにちがいない。そしてこのヴォロヴィヤから実際にチエルマシニヤーに向かったドミートリーは、後で「十二キロ」どころか「二八キロ」もあつたとこぼすことになる。スターラヤ・ルツサからほど遠からぬところに、第二のチエルマシニヤーを設定した作家の意図とは何であつたのか。そもそも、『カラマーゾフの兄弟』はこの父親殺しの事件を何年に想定していたのか。

「アレクセイ・フォードロヴィチ・カラマーゾフは、今からちょうど十三年前、悲劇的な謎の死をとげて当時たいそう有名になつた（いや、今でもまだ人々の口にのぼる）この郡の地主、フォードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフの三男であつた」『カラマーゾフの兄弟』の完成は、一八八〇年のことであるから、そこからすなおに十三を引けば、一八六六年という数値が出てくる。かなり妥当な答えであり、有名なドストエフスキー研究者グロスマンはこの説をとっている。だが、江川卓は、さまざまな裏づけをもとに、グロスマンのこの説に異をと見え、一八七二年説を打ち出した。ここに一つ、江川の一八七二年説を補強するデータがある。すなわち、

「鉄道まで八十キロある」と書かれているこの鉄道駅を、先ほども述べたように、かりに大ノヴゴロドと想定すると、難題はいとも容易に解決するのである。なぜなら、サンクトペテルブルグとモスクワ間の鉄道敷設が完成するのが、一八五二年、私がスターラヤ・ルツサに来る途中、軌道の変更が行われたチュードヴォと大ノヴゴロドをつなぐ鉄道が開通したのが、一八七二年（さらに大ノヴゴロドからスターラヤ・ルツサ間は一八七八年に開通した）。つまり、『カラマーゾフの兄弟』の事件は、少なくとも一八七二年以降に起こったことになる。イワンは開通したばかりの鉄道を用いて、チュードヴォまで行き、そこから幹線鉄道でモスクワまで赴いたことになる。さらにもう一つ面白いのは、『カラマーゾフの兄弟』第二部の舞台が、一八八五年（一八七二年十三年）に設定されていたという事実である。ドストエフスキーはおそらく第一部の完成に五年はかかると読み、皇帝暗殺という国家的レベルでの「父親殺し」を五年後に予見していたことを意味する（現実には、ドストエフスキーの死の直後にあたる一八八一年三月にアレクサンドル二世暗殺事件が起こった）。

時間と空間の縫い目——。イリメニ土から見た、凍結した湖の美しさは、まさにその象徴的な光景なのかもしれない。時はとまり、何一つ物音も聞こえてこない。遠くの林の枯れ枝に無数のカラスたちの姿が見えるが、鳴き声は届かない。ところが、この、凍りついた湖のどこからか断末魔の叫び声が聞こえてくるような気がする。夏の早魃で海岸線が著しく遠のいたらしく、船が砂地に乗り上げている。湖の沖に向けて棧橋のように延びた砂地には蟻のような人影が見える。ヤクト人戦没者の慰霊塔が見えてきた。

「記憶よ、永久に。一九四三年にイリメニ湖で戦死したヤクト人兵士たちに捧ぐ」

そこから車でさらに五分と離れていないところに、今度はドイツ人の共同墓地に遭遇した。中央に高さ四メートルほどの十字架を据え、それを取り囲むようにして高さ二メートル五十センチの御影石が六つ、たがいに向かい合いながら立つて

いる。御影石に近づくと、細かい文字で、びっしりと人名が刻まれている。独ソ戦開始からわずか二ヶ月、ドイツ軍はすでに大ノヴゴロドまで迫っていたが、八月上旬の激戦で多数のドイツ人が死んでいることがわかる。墓碑銘の筆頭には次のような人名が刻まれていた。Abing Alois Schutze 1920.4.16 - 1941.8.23。ナチス・ドイツ軍の兵士にも、一人や二人、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのある若者はいたにちがいない。しかし、今、自分が息絶えようとしている湖が、その舞台の一つであり、よりにもよって、ドミートリーとグルーシエンカの、あの、美しくもけたたましい饗宴が催された土地であることなど。

共同墓地を囲う敷石を越え、ウラジスラフの待つ車へと急ぎながら、見納めにと湖のほうを振り返ると、遠くに見えた人影が動きだしている。車から出てきたウラジスラフに私は言った。

「ごらんよ、人が歩いている」

「そうさ、魚を釣って帰るところなんだ。仕事なんて何もないし、だれも給料など払ってくれない。そうしたら、魚を釣って生きるしかないんだ」

驚いたことには、ブレーギの村から一歩幹線道路に出ると、不意をつくように、目の前に「生ける水」の十字架とお堂が姿を現した。期待した功德には、ついにありつけなかったもの、それでもよしとしなければならぬ。私たちの車は、予定からだいぶ遅れ、夕刻の六時過ぎにホテル・ヴォルホフに到着した。列車が出るまでのおよそ三時間、せつかくだから、ノヴゴロドの町も歩いてやろうと考えたが、皮膚を裂くような寒さに、両足は凍りついたままだ。凍結したヴォルホフ川の、銀色に光る水面に、かすかな夕映えが滲んでいるのが見えた。闇のなかに沈んで行く川べりの風景を見下ろしながら、私は自分がまるで体をなくし、小さな点と化していくような錯覚に陥りはじめていた。

孤独に抗おうとする何かはげげ、それはみるみる膨れあがっていった。こうなったら、食べるしかない。そうだ、まだ昼食もとっていない。ヴォルホフ・ホテルで普段より少しばかり豪華な食事を楽しみ、勢いをつけよう。月曜日ともあれば、

レストランの客も少ないはずだから、多少は歓迎してもらえないかもしれない。クレムリンの門を出て、広々とした夕暮れの公園を急ぎ足で横切り、ホテルに飛び込んだ私は、レストランの照明におびき寄せられるようにして、バンド用のステージに近い壁際のテーブルに陣取った。私のほかに客の姿はなかった。ウエートレスが運んできたメニューに目を通しながら、胃袋の許容量を推し量ってみる。ウオツカ百グラム、ウクライナ風ボルシチ、モスクワ風サラダ、そしてメインに羊のシャシリク……

食事を終えて、ホテルのロビーに戻った私は、革張りのソファに腰をうずめ、久しぶりに気分の高まりを覚えながら、パソコンのカバーを開いた。だが、酔いは思ったよりも深く、白い画面に二行を書きこむと、両手の動きが止まった。

「かつてこれほどに重く、気の滅入る旅を経験したことはなかった」

午後九時十三分発モスクワ行き列車は定刻どおりに大ノヴゴロド駅を出た。出発までの間、冷たい風が吹きとおる構内をぶらぶらしていると、出発時刻表が目に入ってきた。この、大ノヴゴロドを毎日出る列車は、なんと二日に六本しかない。「ヴェリーキー・ノヴゴロド」と毛筆体のようなキリル文字を刻んだ列車に乗り込んだ私は、車内を点検している車掌にチケットを示し、コンピュータメントに入った。幸い、同室の客はなく、サイドテーブルの朝食は行きのものと同じだった。

大事な目的を果たせなかったことに、心残りを感じたものの、諦めの思いのほろがまさった。ロシアで何もかもいくなど、奇跡に近い、と自分を慰める。『カラマーゾフの兄弟』の主人公たちが息をした空間を、犬のように嗅ぎまわることができただけでも御の字ではないか。そうでなくても、今、私が乗っている列車は、イワン・カラマーゾフが、明日、父親殺しが行われるのを予感しつつ乗り込んだモスクワ行きと同じ列車なのだから。当時はまだ、列車の速度も遅かったから、出発の時刻も午後七時と少し早めだったが、今であれば、イワンも一日一便のこの列車に乗り込まざるをえなかったろう。そして、チュードヴォの中継駅を出る頃、イワンは、

スターラヤ・ルツサイヤスコトブリゴニエフスクのカラマーゾフ家で、自分の父親が殺されるさまをあれこれ思い描いていたにちがいない……。それにしても、イワンは、なぜサンクトペテルブルグではなく、モスクワに向かったのか。待て、イワンはあの夜、確実にモスクワに向かったのだろうか。ウオツカの酔いの残る頭に、突然、一つの疑問が稲妻のように閃いた。